

## 翻訳方針前文

近代日本における福音宣教の開始後、聖書はいち早く日本語に訳された。それは教会の正典として用いられただけでなく、言語、文学、思想など、日本文化全体の発展にも貢献した。過去の聖書協会による邦訳聖書刊行だけを見ても、『明治元訳』（1887年）の後、『大正改訳』（1917年）、『口語訳』（1955年）、『新共同訳』（1987年）と、およそ30年おきに改訂あるいは新訳がなされている。翻訳作業に10年かかるとすれば、『新共同訳』が刊行されて20年が過ぎた現在、聖書の新しい訳が検討されるべき時期が来ていると言えよう。実際、過去数十年間に生じた聖書学、翻訳学などの進展、底本の改訂、日本語や日本社会の変化、また『新共同訳』見直しへの要請が、新しい翻訳を求めている。

新しい聖書翻訳は、

(1) 共同訳事業の延長とし、日本の教会の標準訳聖書となること、また、すべてのキリスト教会での使用を目指す。

(2) 礼拝で用いることを主要な目的とする。そのため、礼拝での朗読にふさわしい、格調高く美しい日本語訳を目指す。

(3) 義務教育を終了した日本語能力を持つ人を対象とする。

(4) 言語と文化の変化に対応し、将来にわたって日本語、日本文化の形成に貢献できることを目指す。

(5) この数十年における聖書学、翻訳学などの成果に基づき、原典に忠実な翻訳を目指す。底本として、旧約（BHQ）・新約（UBS第5版）・旧約続編（ゲッティンゲン版）など、最新の校訂本をできる限り使用する。

(6) 文学類型の違いを訳出して原典の持つ力強さを伝達する努力はするが、聖書が神の言葉であることをわきまえ、統一性を保つ視点を失わないこととする。固有名詞や重要な神学用語については『新共同訳』のみならず、過去の諸訳も参考にして、最も適切な訳語を得るようにつとめる。

(7) その出版に際して、異読、ならびに地理や文化背景などを説明する注、引照聖句、重要語句を解説する巻末解説、小見出し、章節、地図や年表、などの本文以外の部分は、できる限り様々な組み合わせを考え、読者のニーズに応える努力をする。

上記翻訳方針前文は2009年10月6日の第四回諮問会議にて決議され、日本聖書協会理事会に提出された答申である。諮問会議議員は次のとおり。

### 諮問会議議員（団体名順）

ウェスレアン・ホーリネス教団	黒木 安信	日本キリスト改革派教会	三野 孝一
キリスト教学校教育同盟 ①	寺園 喜基	日本キリスト教会	三好 明
キリスト教学校教育同盟 ②	山本 真司	日本メソヂック教団	石田 学
沖縄バプテスト連盟	喜友名 朝順	日本バプテスト同盟	山本 富二
基督兄弟団	池本 潔	日本バプテスト連盟	濱野 道雄
救世軍	平本 直	日本ルーテル教団	柴田 千頭男
在日大韓基督教会	朴 寿吉	日本基督教団 ①	内藤 留幸
聖イエス会	辻田 協二	日本基督教団 ②	中野 実
日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団	川上 良明	日本聖公会	興石 勇
日本カトリック司教協議会 ①	下窄 英知	日本福音ルーテル教会	鈴木 浩
日本カトリック司教協議会 ②	岩本 潤一		